

## ヴェルサイユ庭園

絶対王政の夢のあと

### 川瀬喜雄

KAWASE Yoshio  
株式会社 復建エンジニアリング / 第三技術部 / 技術参事



ヴェルサイユ宮殿の西側にあるテラスに立ち眼下に広がる庭園を見下ろした時、誰しもがその広大さ、水と樹木の豊富なことに目をみはるであろう。その光景は17世紀に栄華を極めたブルボン王朝の絶対権力の象徴であり、また王家の人々や従事した技術者達の夢の名残でもある。

ヴェルサイユ宮殿・庭園はパリの西南西約20kmに位置するヴェルサイユ市にある。

ヴェルサイユ庭園の歴史は、ルイ13世がフィリペール・ル・ロワに命じて建築させた「狩の館」の庭をジャック・ド・ムヌールが1631年から1636年にかけて造園したことで幕を開ける。当初はごく小規模なものであったが、ルイ14世が親政を開始して数年たった1663年から大々的に拡張されていった。この間ルイ14世は常にこの庭園に強い関心を持ち続け、多くの人々に紹介する目的で自ら「ヴェルサイユ庭園見学の手引き」と題する本を著している。莫大な造園費用が投じられる中、1682年に宮廷はパリからヴェルサイユに移され、さらに主だった貴族たちは全て召集されて、連日連夜宮殿内では派手な

祝宴が催された。これは敵対勢力の力を奪い、半ば奴隷状態として王に忠誠を誓わせるための方策であったと言われている。

まずは「水の前庭」から「ラトナの泉水」を経て「アポロンの泉水」に至る「王の散歩道」と呼ばれるセンターラインを歩くことにした。

庭園拡張計画の中心人物であるアンドレ・ル・ノートルは1663年からヴェルサイユ庭園の工事に取り組んだ。彼は、複雑な地形のこの場所に自分の得意とする遠近法の原理や光学的な手法を積極的に採用した。その結果が幾何学的な「花壇」や「泉水」の配置、直線状に延びる「大運河」として表現されている(巻頭グラビア写真9参照)。

「王の散歩道」から宮殿方向を振り返ると、歩いてきたルートが下り道となっており、開放的なスペースが宮殿建築を引き立てていることに気づく。さらにこのルートが庭園中央を貫いている中心軸であり、樹木庭園やコンコースはこの中心軸に対称に配置されていることが理解できる。また、庭園内に見られる数々の泉水はイタリア出

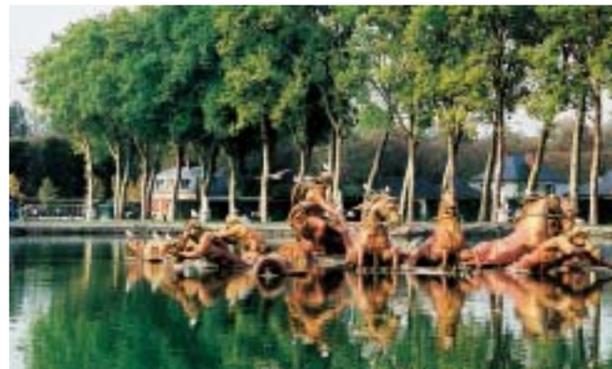


写真1 - アポロンの泉水



写真2 - 南花壇



写真3 - ラトナの花壇から宮殿を望む



写真4 - 王の散歩道と宮殿

身の水力技師フランシニ兄弟の手によるものである。「王の散歩道」の両側には、同一の高さに刈り揃えられた高い生垣や古代ギリシャ・ローマ時代の神話をモチーフとした白い大理石の彫像、そして奇抜なデザインのイチイの木のプロビアー(装飾的剪定)が配されている。ここまで見るとル・ノートルの設計思想の基本は「全体を軸線上に対称に配置し、細部に見られる奇抜なデザインとのバランスを図る」ものであることが分かり、ヴェルサイユ庭園がフランス式庭園の代表であると評価される理由も理解できた。

ヴェルサイユ庭園の主軸線を外れた大運河の北端付近にはグラン・トリアノンとプチ・トリアノンの二つの離宮がある。グラン・トリアノンは1687年に完成したイタリア風の離宮であり、一方プチ・トリアノンは、時代は下り1768年に完成した離宮である。マリー・アントワネットは、この離宮

とその北側に隣接した「水車小屋や農園と牧場を備えた田舎風の小集落を再現した村」で気晴らし三昧の生活を送った。なお、この疑似農村は当時流行していた自然回帰の思想を反映したものであると言われている。

1999年12月にこの地方を襲った嵐のためプチ・トリアノンの庭園内の多くの樹木が倒されてしまい、立入禁止となった箇所が多くあったことは残念である。ヴェルサイユ庭園は、17～18世紀にこの地にあった絶対王政権力の桁外れのスケールとそこで繰り広げられた様々な人間模様の遺産でもあると言える。

(写真: 3、4、初芝成應 他、筆者)

- 参考資料  
1)ヴェルサイユそのすべて、シモーヌ・ホーグ、ベアトリス・ソール著  
2)ヴェルサイユ宮殿、庭園ガイド、シモーヌ・ホーグ著  
3)ユネスコ世界遺産8西ヨーロッパ(講談社)



写真5 - プチトリアノンに隣接した疑似農村内に建つ王妃の家